

月の花挽歌 ～15. 最終章 突然炎のごとく 真紀と麻里子～

15-5

18時30分に頼んでおいた夕食が客室数48室の内の別棟にある豊年虫8室専用の厨房から配膳されてきた。

麻里子は事前にフロントに電話をして、宿泊メニューの会席料理(季節の献立10品)の3品目のお造り(四品盛り)を信州サーモン一品に9品目のお食事(栗おこわ)を手打ちそばに変えてもらっていた。

がっしりとした体形に豊年虫専用の浴衣を着た辰巳と和テーブルをはさんで対峙したよそ行きのネイビー色で半袖スウェットワンピースを着た麻里子は雑念を払うかのようにビールの栓を抜いた。

「いいホテルを取ってくれてありがとうございます」と辰巳は言って微笑んでから、美味そうにビールを飲んだ。

「気に入っていただけると思っていました」

麻里子は美しい瞳を覗かせて低く笑った。

ビールを一本飲み終わったところで、デカンターに移し変えてもらっていた720mlの日本酒を常温で酌み交わした。

「弊社の蔵で仕込んだ純米大吟醸『月の花』です」と麻里子は自信ありげに言った。

「なかなかのものだね」

「なかなか、ですか？」

「いやいや、ベリーグッド、ベリーグッドです」と辰巳は微笑しつつ、口の中で同じ言葉を繰り返しつつぶやいてみせる。

「ご無理なさいませんように」と麻里子は言って、愉快そうに笑った。

「ところで、この魚はなんだろうか？」と辰巳は刺身を口にして訊いた。

「信州サーモンです。長野県の水産試験場が10年かけて開発した鱒類の養殖新品種で、5年ほど前に水産庁に承認されました」と答えた麻里子は、辰巳が興味を示してくれたことが嬉しかった。

「美味しい魚だ。地魚に地酒とは、乙なものだね」と辰巳は上機嫌で言って、再び信州サーモンを食べてから『月の花』を流し込んだ。

「信州サーモンは海には出ないんです」

「海に出なくたって、地魚で構いやしないじゃないか」と辰巳は、らしからぬ口ぶりで言った。

「そうですとも。わかっていますよ」と麻里子は笑って言い返した。

「あなたは何も知らなそうなふりしているくせに、男の喜ばせ方をわかっているね」

「あら、随分な言い方をなさいますこと」

私は瞳を蒼くしてもかまわない

どうして欲しいか話してちょうだい

そんなこんなで、口代わりの信州牛の陶板焼きや焼き物の鱸のオレンジ風味焼や煮物の豚の角煮酒粕がけ等を食しつつ、他愛もない話で盛り上がり、『月の花』も飲み尽くしそんな頃合いに、手打ちそばが供された。